

II-2 中津藩蘭学の系譜

川 寫 眞 人

前野良沢から福沢諭吉に至るまで、中津藩は多くの蘭学者を輩出し、日本の近代化のために大きな貢献をした藩である。明治四年（一八七一）、中津医学学校校長に就任した大江雲沢は「医は仁ならざるの術、務めて仁をなさんと欲す」という医訓を残し、外科医としてのみならず、教育者として優れた業績を残した医師として知られている。大江雲沢の家を調査したところ、華岡青洲の画像や多数の華岡流外科手術図が発見され、当時の中津藩から華岡塾の大坂分塾に五名の医師が派遣され、学んでいたことが判明した。そのほかに解体新書や重訂解体新書なども発見されており、前野良沢を生んだ流れが幕末でも続いていたと考えられる。

雲沢は「ばい瘡經驗方 叙」という医訓の中で、文献や経験のみに頼り過ぎる医療の恐さを指摘し、自分の犯

した医療事故についても記載し、自らの頭でよく考え、先人の教えを謙虚に学ぶことの重要性を述べている。

中津医学学校の病院長を務めた藤野玄洋は緒方洪庵の適塾で蘭学を学び、長崎の医学校でボードインより外科学、眼科学を学び、大分医学学校の設立建白書を大分県に提出し、その実現に苦心した。明治十年（一八七七）、西南戦争勃発のため、下関に月波楼医院を設立、戦傷者の収容に備えたが、この医院は妻ミチによって、春帆楼という料亭となつて、日清戦争の講和条約の談判会場として歴史にその名前を残した。長崎に近い中津は多くの留学生を長崎にだしており、幕末においても福沢諭吉をはじめとして長崎の蘭学の影響は大きい。

中津出身の外科医として、松本良順らと医学会の始まりである「医学会社」を起したり、「外科手術」や「医事新聞」を発行した田代基徳が知られている。基徳の実父は松川北渚といい、亀井昭陽の高弟であり、田能村竹田、頼山陽とも交遊した儒医である。福岡の亀井一族の漢学は中津にも影響をおよぼしていた。基徳は緒方洪庵の適塾に学んだ。適塾には福沢諭吉をはじめ十一人が学んで、

幕末の中津藩蘭学者に影響をおよぼした。その養子義徳は整形外科の開祖として、初代東大教授に就任した。中津に次々と医学のパイオニアが出現した背景には中津藩が藩を挙げて、蘭学に取り組んだという背景がある。

中津城三代目の藩主奥平昌鹿は母の骨折を長崎の蘭方医吉雄耕牛が見事に治療したことから、蘭学に興味を抱き、藩医前野良沢を長崎に派遣した(一七七〇年)。良沢は藩主の期待に応え、ターヘルアナトミアを杉田玄白らと翻訳して、蘭学の開祖となったことはあまりにも有名である。五代目藩主奥平昌高は薩摩藩・島津家からの養子でありシーボルトとも親交し、自らもオランダ語を学び、日本で最初の和蘭辞書「蘭語訳撰」(二八一〇年)、三番目の蘭和辞書「中津バスタード辞書」(二八二二年)を出版した。これらの辞書に関与した蘭学者は前者は神谷弘孝、後者は大江春塘である。ともに長崎に留学してその影響を受けた。昌高は同じく長崎に留学させていた村上玄水の九州での最初の人体解剖を許可した(一八一九年)。玄水は解剖の記録を「解臍記」として残し、その家は三〇〇〇点の医学史料を蔵する村上医家史料館と

して、保存公開されている。

嘉永二年(一八四九)、辛島正庵を始めとする中津の医師十名は、長崎に赴き、バタビア由来の種痘のための、痘苗を入手し、中津に持ち帰って、種痘に成功した。辛島家には四〇〇点を越す医学史料が発見された。

中津医学学校の基礎となった、中津医学館は種痘の成功に市民が感動して、ボランティア基金が集り、文久元年(一八六一)勢溜に設立され、種痘館としても、大いに活用された。

医学史上に残る中津の医師達の活躍の背景には、藩を挙げて蘭学に取り組み、蘭学を学ばせた中津藩があった。常に時代のニーズを先取りし、時代の先端を行きながら、人材の育成を怠らなかつた中津藩の仕上げは福沢諭吉によって行われた。諭吉は自らが蘭学を学んだことを忘れず、藩の先達前野良沢たちの苦勞を顕彰するために「蘭学事始」を明治二年(一八六九)に復刻し、序文の中で良沢たちのパイオニアの苦勞は涙無しには語れないと述べている。

(医療法人玄真堂 川嶋整形外科病院)